

演習 保育内容

表現

— 基礎的事項の理解と指導法 —

岡 健
金澤妙子 編著

今川恭子
岩田遵子
岡田たつみ
児嶋輝美
坂本喜一郎
田代幸代
堂本真実子 共著



建帛社
KENPAKUSHA

はじめに

皆さんは、保育の専門家になるために、それぞれの養成課程のカリキュラムの中で、保育内容の基礎的事項ならびに指導法について、実践に基づいてより深く学ぶことが求められている。

2018年度から新たな幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領がスタートした。今般の改訂（定）では、幼稚園，保育所，幼保連携型認定こども園（以下，こども園と略記）のいずれにおいても幼児教育が行われることに決まった点は，大きな改訂（定）のポイントといえるだろう。また，小学校就学前までに育みたい資質・能力が示されるとともに「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が視点として明示された点も大きなポイントといってよい。ただし，その基本はやはり，これまでと同様に5領域の保育内容を通して育むとしている点は変わっていない。

保育内容である「領域」ごとのねらいと内容の共通化が図られ，また，3歳児以上の保育内容の共通化や，3歳未満児の保育内容についても保育所とこども園の間で共通化が図られた点も確認しておく必要がある。

さらに付け加えるならば，保育士養成課程を構成する科目であった「保育の表現技術」は「保育内容の理解と方法」へと変更されることに伴って，旧科目の目標の二つ目として掲げられていた「身体表現，音楽表現，造形表現，言語表現等の表現活動に関する知識や技術を習得する」はすべて削除され，新科目ではこれまでの目標に対して，「保育」における「子どもの生活と遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術」の習得を目指す旨が付け加えられているのである。

では改めて，「表現」について基礎的事項ならびに指導法を学ぶとは，どのようなことなのかを考えてみたい。

そのためにはまず，「生活」「遊び」そしてその中にある子どもの「表現」とは何か，子どもの育ちを「表現」という視点から見つめるとはどの

ようなことなのかを、たくさんの事例を通しながら考えていくことが必要であろう。

本書は、教職課程コアカリキュラムの教育内容をより具体的に示したモデルカリキュラムに準拠した内容と関連させて各章を編纂してあるのみならず（対応関係はp. iii - ivの対応表を参照）、多くの章で、たくさんの具体的な事例を掲載することによって、子どもの姿がイメージしやすくなるような展開を心がけている。その結果として、これまで「表現」を学ぶことを、単に個別の表現技術それ自体の習熟と捉えていた視点からの脱却を皆さん方に対し促していくことになればと思っている。

「子どもはこんな風に心を動かすんだ」「子どもはこうやって動いた心を表出しているんだ」「人に受け止められ、自分でもそれを確認する中で、こんなにも表出・表現は変化していくんだ」と、たくさんの驚きと、そこに寄り添う楽しさや魅力を感じてもらえたら幸いである。

本書が、あなたの素敵な学びのガイドになることを期待して。

2019年6月

編著者を代表して 岡 健

A. モデルカリキュラム「幼児と表現」における到達目標と本書の対応項目

(1) 幼児の感性与表現	
〈一般目標〉	
幼児の表現の姿や、その発達を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼児の遊びや生活における領域「表現」の位置付けについて説明できる。	第1章, 第6～9章
2) 表現を生成する過程について理解している。	第2・3章, 第6～9章, 第11章
3) 幼児の素朴な表現を見出し、受け止め、共感することができる。	第2・3章, 第6～10章
(2) 様々な表現における基礎的な内容	
〈一般目標〉	
身体・造形・音楽表現などの様々な表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 様々な表現を感じる・みる・聴く・楽しむことを通してイメージを豊かにすることができる。	第3章, 第6～9章
2) 身の周りのものを身体の諸感覚で捉え、素材の特性を生かした表現ができる。	第3章, 第6～9章
3) 表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析することができる。	第3章, 第5～9章
4) 協働して表現することを通し、他者の表現を受け止め共感し、より豊かな表現につなげていくことができる。	第3章, 第5～9章
5) 様々な表現の基礎的な知識技能を生かし、幼児の表現活動に展開させることができる。	第5～9章

B. モデルカリキュラム「保育内容「表現」の指導法」における到達目標と本書の対応項目

(1) 領域「表現」のねらい及び内容	
〈一般目標〉	
幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「表現」のねらい及び内容を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、領域「表現」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。	第1章, 第4～6章
2) 領域「表現」のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。	第4～6章
3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。	第1章, 第4～6章
4) 領域「表現」に関わる幼児が経験し身に付けていく内容の関連性及び小学校の教科等とのつながりを理解している。	第5・6・11章
(2) 領域「表現」の指導方法及び保育の構想	
〈一般目標〉	
幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「表現」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を修得し身に付ける。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼児の心情、認識、思考及び動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解している。	第5～10章, 第12章
2) 領域「表現」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。	第5～10章, 第12章
3) 指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。	第1・12章
4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。	第8・12章
5) 領域「表現」の特性に応じた保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。	第1・11・12章

目次

第1章	保育者の専門性への誘い：「領域」をなぜ学ぶのか	7
第2章	乳幼児の発達と「表現」	8
1.	発達ということ	8
2.	表現ということ	9
3.	様々な発達と表現	10
	(1) 言葉の発達から見る	11
	(2) 運動機能の発達から見る	12
	(3) 知的機能の発達から見る	16
	(4) 社会性の育ちから見る	17
	(5) 情緒・心情の発達から見る	18
第3章	意味受容・意味生成としての身体	19
1.	「意味世界」としての私たちの生活世界	19
2.	意味を受容し、生成する身体	20
3.	同調する（響き合う）身体：音楽的表現の始源性	22
	(1) 他者と同調する（響き合う）身体	22
	(2) 音楽的表現の「意味世界」の始源としての意義	23
4.	他者から距離を取り、止まる身体：記号表現・視覚表現の始まり	24
第4章	領域「表現」のねらいと内容および評価	27
1.	幼稚園教育・保育の基本と領域の考え方	27
	(1) 「領域」とは何か	27
	(2) 「視点」としての「領域」	28
2.	領域「表現」のねらいと内容	28
	(1) 心情・意欲・態度をふまえた3つの「ねらい」	28
	(2) 「ねらい」を達成するための内容	30
3.	幼稚園教育における評価の考え方	33
	(1) 保育における「評価」とは	33
	(2) 「表現」の評価	34

- 4. 幼稚園教育要領 領域「表現」の内容の取扱い……………35
- 5. 資質・能力および10の姿……………37
 - (1) 育みたい資質・能力 37
 - (2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿) 38

第5章 「表現」を生む場をどう捉え、つくるか：「表現」と環境構成……………40

- 1. 表現を支える環境……………40
- 2. 子どもの姿……………41
 - (1) 5つの観点から 41
 - (2) 3つの場所で 42
 - (3) 子どもたちの姿から学ぶこと 44
- 3. 感じて、働きかけて、表すことを支える環境構成……………47
 - (1) 基本的な考え方 47
 - (2) まとめ—環境構成の留意点 47

第6章 子どもの「生活」と「表現」……………50

[1] 受け止めること・表すこと……………50

- 1. 表す存在としての子どもと育ち……………50
- 2. 様々な表しと受け止め……………51
 - (1) 泣く 52
 - (2) ほほえむ・笑う 53
 - (3) 腕の動きを楽しんで 54
 - (4) みんなで体を動かして 55
 - (5) 順番を待つすきに 57
 - (6) 壁面製作で 58
 - (7) 生活経験の中から 60
- 3. 表しを受け止める楽しさ……………62

[2] コミュニケーションとしての表現……………63

- 1. 見ること……………63
- 2. まねること……………64
- 3. 見せること……………65
- 4. 一緒に動くこと・歌うこと……………66
- 5. 聞くこと……………68

6.	やりとりすること	69
7.	かけ合うこと	70
8.	うかがうこと	71
9.	話し合うこと	72
10.	おしはかること	74
第7章	音楽的表現	75
1.	音楽によるコミュニケーション	75
2.	「会話」としての音楽	76
3.	身体に訴えるリズムの力	77
4.	楽しさを共につくる手遊びの魅力	78
5.	表現を見せることとその過程を伝えること	79
6.	楽しさを支える音楽的な能力の育ち	81
7.	表現を客観的に捉える能力	82
8.	音楽的表現を通して成長するという事	83
第8章	造形的表現	86
1.	子どもが様々な素材に触れること	86
2.	発見や心が動く経験を通して、子どものイメージや感性が豊かに育つこと～2歳児の廃材を使った造形遊びを通して～	87
	(1) 様々な素材との出会い	88
	(2) 子どもの「伝えたい」「分かってもらいたい」を支えるために	93
3.	子どもが自分らしい様々な表現を存分に楽しむこと～幼児のアトリエでのケーキづくり（粘土遊び）を通して～	94
第9章	ごっこ遊び・劇的表現	100
1.	ごっこ遊び	100
	(1) 憧れの存在になりきって動く	101
	(2) 友だちと絵本の世界を共有しながら自分のイメージで動く	102
	(3) 友だちと協同してイメージの世界を実現する	103
	(4) ごっこ遊びの中で資質・能力が育つ	104
2.	劇的表現	105
	(1) ごっこ遊びと劇的表現の類似点と相違点	105

- (2) 劇的表現における方法論的問題 105
- (3) プロセスを大切にした劇的表現の創造 106

第10章 表現を支える保育者の役割……………112

- 1. 表現を受け止める……………112
- 2. 事例から捉える保育内容……………113
 - (1) 受け入れること、表現すること 113
 - (2) その子なりの表現 114
 - (3) 心が動く体験 115
 - (4) 歌で表し、歌から力をもらう 116
 - (5) 批評を受け止め、発展させる 117
 - (6) 表現を支える仲間関係 118
- 3. 子どもと共に楽しむ……………120

第11章 領域「表現」をめぐる現代的な課題……………121

- 1. 子どもの権利としての「意見表明」と「表現」……………121
 - (1) 「子どもの権利」という視座 121
 - (2) 「子どもの権利」に向き合うために 124
- 2. 小学校との接続・連携……………126
 - (1) 接続・連携の必要性和陥りやすい問題点 126
 - (2) さながらの生活に見る学びの姿 128
 - (3) 接続・連携をどう模索するか 129

第12章 子どもの表現を支える指導計画……………132

- 1. 表現を支える指導計画……………132
- 2. 遊びを援助する保育者……………133
 - (1) 出来事に着目する 133
 - (2) 見通しをもつ 134
 - (3) 指導計画を立てることの意味 135
- 3. 明日の保育を支える日案とその様式……………135
 - (1) 一般的な様式 136
 - (2) 「保育マップ型記録」の様式 138
 - (3) 「保育マップ型記録」による日案を可能にする遊びの園文化 144

4. 実践の評価と反省	146
5. 保育の質の向上と第三者の視点	149
(1) 保育の質	149
(2) 一人の限界	151
(3) 様々な他者の視点	153
6. 表現を主とする行事と指導計画	153

付 録

学校教育法 (抄)	156
幼稚園教育要領 (抄)	156
保育所保育指針 (抄)	159
就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に 関する法律 (抄)	164

第1章

保育者の専門性への誘い： 「領域」をなぜ学ぶのか



予習課題

1. 「領域」と「教科」について、言葉からイメージされるものを書き出してみよう。
2. その上で、何が違っているのか、友だちと話してみよう。

2017（平成29）年3月に幼稚園教育要領の改訂が告示された。この告示に先だって「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中教審第197号）が示されているが，そこには次のような記載がある。

幼児教育においては，幼児期の特性から，この時期に育みたい資質・能力は，小学校以降のような，いわゆる教科指導で育むのではなく，幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で，感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり，不思議さに気付いたり，できるようになったことなどを使いながら，試したり，いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育むことが重要である。

（下線引用者）

さて，ここで示されている「小学校以降のような，いわゆる教科指導」と幼児教育（以下，「保育」と記載）はどう違うのだろうか。このことは，それぞれの「目標／ねらい」の設定の仕方をみると明らかになる。

保育においては，「目標／ねらい」は原則的に子どもの「興味・関心，ニーズ（育ちへの意志）」を保育者が読み取り，そこに保育者自身の「教育的意図（育ちへの願い）」を添えて設定している（図1-1）。もちろん，子どもの「育ちへの意志」はいきなり生まれるものではなく，子どもの周りの

環境（保育環境）によって触発されることで生じる。だからこそ保育者は保育環境を準備する。そして、触発されて生じた「育ちへの意志」に保育者の「育ちへの願い」を添えて、立てた「目標／ねらい」の実現のために、保育環境を展開していくことになる（「環境による教育」）。

それに対し、「小学校以降のような、いわゆる教科指導」では、基本的に授業の「目標／ねらい」は学習指導要領によって極めて具体的に規定されている。しかもそれは、必ずしも子どもの「興味・関心、ニーズ（育ちへの意志）」とつながりをもつものとは限らない（図1-2）。

具体的に示してみよう。例えば、砂場で子どもがプリンカップで「型抜き」をしていたとしよう。

ある子どもはでき上がった砂のかたまりを見て、「あ、ケーキだ」「プリンだ」等と、いわゆる「見立て」といわれるようなことを楽しんでいるかもしれない。するとこの時保育者は、この「見立て」という行動を起こしているその子どもの活動の中に、「表現」の領域に属するような育ちを見出し、例えば、子どもの「イメージ」がもっと膨らむといいだろうと思って、白砂をかける、花びらや葉っぱを乗せる等々の具体的ななかかわり（環

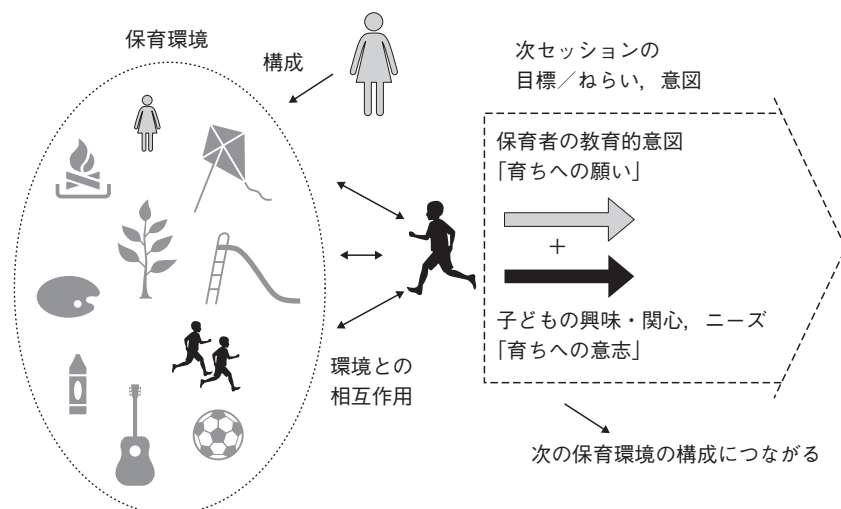


図1-1 保育の目標設定と保育者の役割

（考案：岡 健，作図：平林祥）

境構成)を行う。

しかしまた別の子どもは、「きっとこんな形になるんだよな」「この波々とした部分、山の形のようにきれいにできるかな」等々、自分が抜いている型のでき上がりを頭の中に描き、それが本当にその形になるかどうか、あるいはどうやったらその頭に描いた仮説が実現できるか、その仮説は本当に検証できるか、といった試行錯誤や実験行為を行っているかもしれない。すると保育者は、今度はそこにいわば「環境」領域に該当するような育ちを見出し、「だったらこんな形もあるよ」と、星型やドーナツ型を準備するかもしれないだろう。

このように、保育においては、子どもが「したい」と思っている行動の中に、子どもの育ちの方向性を「意志」として読み取り、そのそれぞれの延長線上に「願い」を設定する。

それに対して、「授業」では、教師はあらかじめ「型抜き」を通して、例えば「見立て」を育てる、といった「目標／ねらい」を設定している。したがって仮に、子どもが知的な好奇心や試行錯誤に取り組んでいたとしても、その興味や関心は原則として認められない。教師は、抜いた砂のか

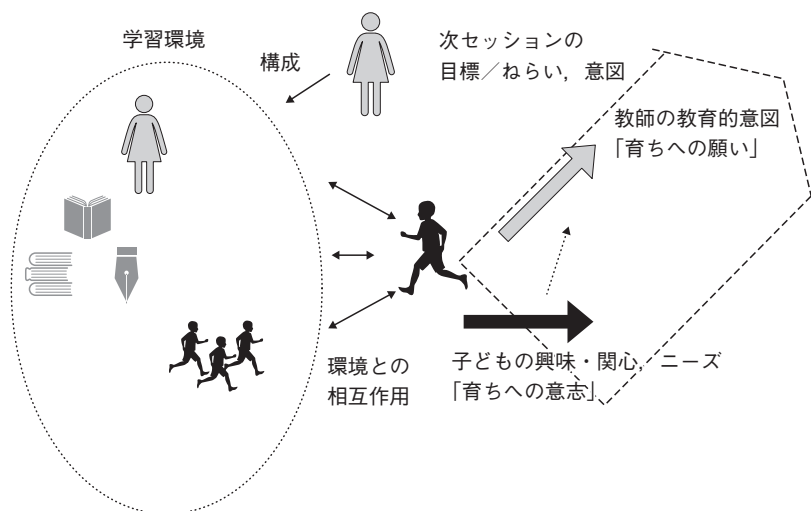


図1-2 教育指導の目標設定と小学校教諭の役割

(考案：岡 健，作図：平林祥)

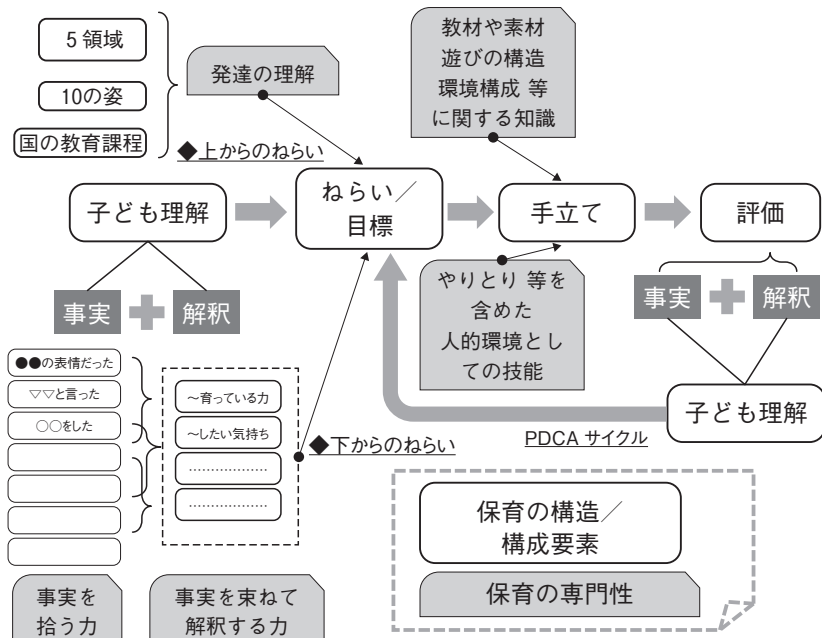


図1-3 保育の構造（構成要素）と専門性

セスに他ならない。

「子ども理解」とは、一人ひとりの子どもの具体的な姿としての「事実」を拾い、それを束ねて、そこにある意味を「解釈」することからなる。この際「解釈」とは、決して保育者の想像や希望ではなく、あくまでも「事実」に基づいたものでなければならない。

次のような例えを出すと理解が促されるだろう。医師が患者を診断する場面を想定しよう。医療に関する専門的な知識をもっている医師は、患者が訴えるある1つの症状だけで病名を判断したりはしない。「お腹が痛い」と患者が訴えてきた時に、即座に「〇〇病」と判断して、薬を出しはしないだろう。患者の症状を十分に確認しないままに、「全般的に炎症を抑える薬」をとりあえず処方することなど許されるものではない。「喉が痛い」「熱がある」「それがどれだけ続いているか」とか、場合によっては血液検査をして、実際の症状や状態を総合的に解釈して病名を決定（診断）し、

力したりする姿も見られる可能性が想定されてくる。また、つくるものも大きくなれば、他の子どもとその表現を共有するかわりも誘発されやすくなるだろう。さらには、そこに水という素材を入れたとすれば、それは型抜きから発展して、川づくりやダムづくりといった動きにまで展開するかもしれない。

保育者は、子どものやっていることと、これからその子どもと周りの子どもが経験するであろうことを想定して、「ねらい／目標」を立てている。そのためには、子どもが今どのようなことを育とうとしているかを読み取ること（解釈する視点）や、その遊びの展開の先に獲得してほしいと願う、いわば育ちの先を想定すること（発達知識）が不可欠となる。領域を学ぶとは、まさにこの「視点」や「知識」を学ぶことに他ならない。保育者は、このことを踏まえ、その「ねらい／目標」の実現のために手立てを想定する。時間を保障し、道具や場を整え、言葉をかけて、その環境を整えていくのである（「教材や素材、遊びの構造、環境構成等に関する知識」や「やりとり等を含めた人的環境としての技能」）。



まとめの課題

- ・幼稚園教育要領（保育所保育指針）の領域の「内容」と、小学校の学習指導要領の（任意の教科、低学年の「内容」）を見比べて、その違いについて気付いたことを友だちと話してみよう。

参考文献

- ・小川博久：保育援助論（復刻版）、萌文書林、2010（初版は生活ジャーナル社、2000）
- ・岡健：子ども理解から指導を計画する、げんき、No.172、2019、2-11